

◆連載-Vol.38

## 現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



## 執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかに・まさと)  
1948年神奈川県生まれ。  
1971年千葉大学建築学科卒業。  
『住宅特集』『新建築』編集長を  
経て1994年からフリー編集  
者。1999年～2014年千葉大  
学客員教授。

## 新たな建築表現を求めて その5

## 高松伸 20世紀のマニエリスト

高松伸が「ひなや本社社屋 織陣 I」を発表したのは1981年。インパクトは強烈だった。

建物のファサードは赤茶色の御影石を立体的に彫り上げながらも、ひとつひとつのピースは正方形で、下部は真鍮のボルトで留めたように見える。ハードでありながらも屋根や開口部には曲線が用いられて柔らかさがある。

驚かされたのは建物の形態だけではない。緻密と言おうか、ある種偏執狂的な密度のドローイングである。B全の紙にエンピツで描いているのだが、この圧倒的な迫力はそれまで見たことがなかった。

きれいに描かれたスケッチはこれまでいくらでもあり、作者のイメージした空間や雰囲気は描かれているのだが、高松のドローイングはこれらとはまったく異質なものだ。エンピツでひたすらブランクを塗り潰していく。鬼気迫ると言ったら言いすぎだろうか。造形に対する怨念すら感じさせる。

時代背景としては、同年に前川國男の「埼玉県立自然史博物館」と「宮城県美術館」、白井晟一が登呂遺跡の中に計画した「芹沢銈介美術館」、芦原義信の「第一勧業銀行本店」(その前年には千葉・佐倉の「国立歴史民俗博物館」が完成していた)、菊竹清訓は「軽井沢高輪美術館」、高橋羲一が自身で「The Concrete」と名付けた「大阪芸術大学芸術情報センター・塚本英世記念館」を完成させ、磯崎新は「利賀山房」(富山県)、原広司は「末田美術館」(大分県)、安藤忠雄は「小篠邸」と「大淀のアトリエ」を発表した。これだけ並べればその時代の趨勢がおわかりいただけるだろう。大御所たちはそれぞれ王道を往き、個性的な中堅もそれぞれの道を確実に進み始めていた。

そんな中に突然「ひなや本社社屋 織陣 I」が登場したのだ。どうしてここまでつくり込むのか、高松に訊いたことがある。彼が京都市内で設計するのは、壁を接して舞めくように並んだ町家の中の1軒。デザインできるのは2間前後のファサードしかない。だからそこに設計者としての全能力を注ぎ込んだのだ。

その翌年に作風の違う「織陣II」を背後に増築し、83年にはディーゼルエンジンをイメージさせるメタリックな「仁科歯科医院 ARK」を京都宇治線「桃山南口」駅のすぐそばに完成させ、さらに「浅野歯科医院 ファラオ」「DANCE HALL」

(1984)、「WEEK」「織陣III」(1986)と続く。そして極めつけは大阪・心斎橋筋道頓堀の脇に建てた「キリンプラザ大阪」(1987)である。これは1989年の日本建築学会賞作品賞を受賞したが、残念ながら現存してはいない。

「織陣」の正面ファサード1面、ほんの僅かな間口しか与えられなかったこと、そして形骸化したモダニズムデザインに対する懐疑心が高松の設計姿勢を決定付けたと思われる。限定された面積に全精力を注ぐ。ところが郊外にも設計するようになるとデザインすべき面積が増えてくる。当然作業における集中力も作業量も倍加する。こうなると構想力だけではなく体力勝負でもある。

「キリンプラザ大阪」には、4面にファサードがあり規模も大きい。外観デザインのために何枚のスケッチを描いたか訊いた。簡単な線描からかなり描き込んだものまで数千枚に及んだという。そろそろ限界か、という言葉がぐったりした高松の口から聞いたこともあった。しかし最終案のドローイングも手は抜かれてない。外観を決める最終段階で、屋上に立つ塔をどのようにするかで迷った。塔のスケッチも多様で枚数も多い。1本でシリンダー状のものから三角、四角とさまざまだが、最終的には4本の白い塔を建てた。

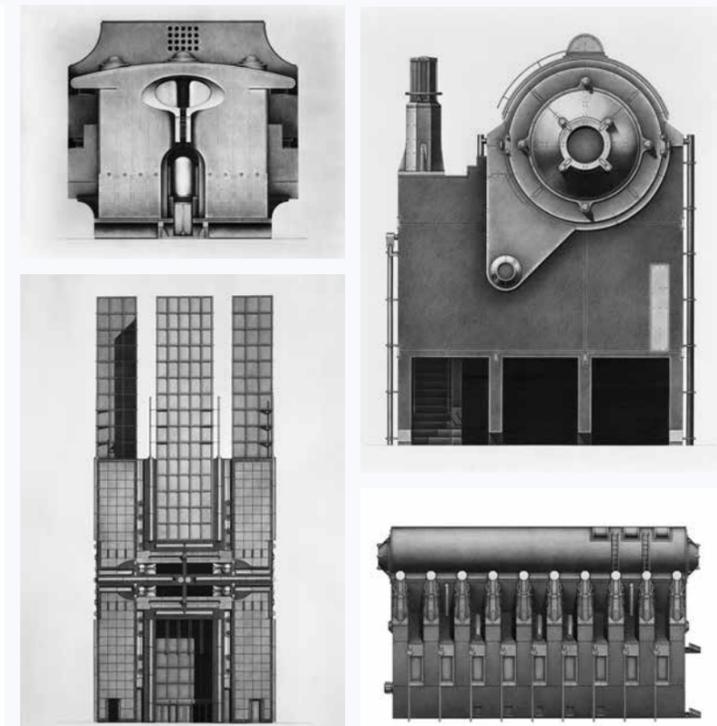
白くした理由について尋ねたことはないが、私なりの解釈で紹介したい。あの猥雑な場所では白しかあり得ない。夜になると道頓堀には色とりどりのネオンが映える。どのような色を選んでも紛れてしまう。光はすべての色を取り込むと白になる。まさにあの場所だからこそ白が映える。掃きだめの鶴と言えようか。

これら一連の作品群は、金属と石あるいはコンクリートなどの鉱物を、あたかも機械のパーツのように組み上げたメカニカルな表情をまとっている。メカニカルな表情や形態には、何かそられるものがある。最近の「土木萌え」とやらもそうかもしれない。機械の持つ緻密で精密な動きや、それがつくり出す巨大な姿には自然界には存在しない。ある意味では逆説的に神秘的なものを感じてしまうのは世代を超えているのかもしれない。

建築がどのような形態をとるか、本来は重要な課題であるはずだ。かつて、用途と形態は一致していて、地図のアイコンなどにも用いられた。いまやどんな用途であれ「豆腐を切ったような」形が蔓延している。変わった形は商業施設がほとんどであり、他と違うことによってアイデンティティを得ようとしているから、そこには目立つこと以外の意図や



左/織陣IIIスケッチ 中上/織陣Iドローイング 中下/キリンプラザ大阪ドローイング 右上・右下/仁科歯科医院 ARKドローイング (提供:高松伸建築設計事務所)



主張はほとんど見られない。施主が望む経済合理主義に疑問も抱かないから、まずはご注文にお応えし、コマーシャルのために取って付けたような飾りや奇態をまとわせることでお茶を濁すことしかできない。

そんなものとは一線を画しているのが高松の作品である。機能主義や合理主義など、施主への迎合でしかないと言ってもように、自分の世界をつくりあげる。もちろん住宅から商業施設、オフィスビル、公共建築まで規模もビルディングタイプも多様でありながら、初期の作品は一貫したイメージを保っている。マニエリストのように、すべてを自らの手によって紡ぎ出す。まさに高松ブランドである。

処女作が「織陣」だと思われるかもしれないが、実際の処女作は兵庫県宝塚市に設計した「駒杵邸」(1977)である。傾斜地に、まるでトーチカのようなRC打放しの住宅で、マッシュではあってもこれといった主張があったわけではない。また、打放しの住宅が増え始めたのは安藤忠雄の「住吉の長屋」以来であるが、「駒杵邸」の竣工はその翌年だから、安藤の影響などとは言えない。RC打放しが持つ重量感と存在感が高松を惹き付けたに違いない。重量感と存在感こそ、高松が追求めたものだったと思う。そしてその先には、おそらく永久に残ることも視野に入っていたのではないだろうか。

阪神淡路大震災の後、高松に電話して被害状況を尋ねた。被害を受けたのはひとつだけ、しかも倒れてきた電柱がぶつかって窓ガラスが割れただけとのこと。構造設計は誰に依頼したのかとの問いには、自分のところでやっている。ただし、法定強度の3割増しで計算しているとのこと。

かつて自宅を事務所としていた頃、トイレの中にはオートー

ワグナーのウィーン郵便貯金局の写真が額に入れて飾ってあったが、これにはかなり共感できるし理解もできる。おそらく高松がウィーンを訪れたときには、アウガルテンに残っているフリードリッヒ・タムスの「アウガルテン高射砲塔」(1944)を見たはずだ。第二次世界大戦時にナチスが建てたものだが、いまでも公園の中に建っている。忌まわしい記憶を壊そうとしたがヨーロッパのコントラクターでは歯が立たず、日本のゼネコンが挑戦するも尻尾を巻いて帰ってきたという逸話が残されている。これを念頭に置いていたのではないかと、というのは私の勝手な妄想。

現代建築において造形を前面に出した先人としては毛綱毅曠がいる。そして高松、その後には北川原温、高崎正治と続く。もちろん、それぞれ建築に対して異なったアプローチを持っていて、それを比べるのも興味を惹かれる作業であるが、それはまたの機会としたい。(続く)



SYNTAX (撮影/ナカサアンドパートナーズ)